
I f I w e r e…。～ベラルーシとリトアニアのお話～

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

If I were…。ベラルーシとリトアニアのお話

【Nコード】

N4816N

【作者名】

しろめのくろねこ

【あらすじ】

ベラルーシさんをリトアニアさんが拉致って「ロシアさんじゃなくて俺と暮らそうぜ☆」「…は？」な話でございますW

(前書き)

ども、しろめです

アルの話の前に短編挟んでしまって申し訳ありません←←

急にインスピレーションが湧いたものですから…

今回はベラルーシさんとリトアニアさんのお話（あ、文中では作風のためにリトアニア⇒トーリスです）

原作EtCではリトとベラ嬢はまったくくっつきそうもありませんが。こっちではどうでせう？

それでは召し上がれ

⇒

私を助けに来て。兄さん。

ふっ、と笑みが漏れる

「ばかね」

来てくれるはずない
だって兄さんは…。

「…。」

耳がひそめられた足音を拾った

緊張からか興奮からか

心臓の音がどくどくと煩い

「誰だか知らないけど、馬鹿な奴ね」

よりによって私を拉致るなんて

私は慣れてきた目で周りに障害物が無いことを確認する

太ももに括り付けられた短剣を抜き、扉から適度な距離を置く

今更気づいたが手錠も足枷も嵌まっていない

なんて間抜けな誘拐犯！！

足音はぴたりと部屋の前で止まる

私は短く息を吐くと身を滑りこましてきた誘拐犯の首筋に短剣をかける

「ひいあああ」

「っ!？」

なんて情けない声をだすの!？
それに、この声…

「あなた…」

「ごめんべらルーシちゃん」

私はあっけにとられた

そしてこんな奴に誘拐された自分が恥ずかしくなった

「この状況を10秒で説明しないと殺す　——トリス」

「…で？」

私はテーブルの上で行儀悪く肘をついてトリスを睨む

「だ、だからあ。俺はベラルーシちゃんと一緒に居たくて思わず拉致っちゃっ…」

「見苦しい嘘ね」

ため息をついて視線をそらす

トリスはそんな些細な動作の一つ一つにびくびくとして煩わしいことこの上ない

「さっさと本当の理由を言いなさい」

「なんで信じてくれないの」

「信じて欲しいわけ？」

トリスはきょとんとした

「私はあなたはそんなつまらないことする奴じゃないって思ってたのに残念だわ」

「…」

トリスは目を見開いて、頬を上気させた

な、なによその顔

緩みっぱなしで気持ち悪い

「俺ベラルーシちゃんは俺のことなんにも見てくれないと思ってたよ」

「別に見てた訳じゃ…」

ただしつくつく付き纏ってきたから厭でも目に入っただけで…

「あのね」

トリスはこほんと空咳をつく

やっと先程の下手な嘘を撤回する気になったか

私は半眼だった目を少し開ける

「ロシアさんなんか忘れてさ、俺と暮らそう。ベラルーシ」

「な」

条件反射のように怒りが込み上げて机を強く叩いて立ち上がる

トリスの胸倉を締め付け噛み付くようにいった

「ソレ以上言うなら殺す。私は兄さん以外の人間に興味ない」

私はゴミを捨てるようにトリスを床にたたき付けると玄関へと向かう廊下へと向かう

「ならさあ!!!」

数回咳込んだ後にトリスの声が追い掛けてきた

「ロシアさんは君以外に興味ないと言えるのか？」

不覚にも立ち止まってしまう

「答えはNOだ。それどころか君を見てくれないし、君に笑いかけたくない!!!」

「黙りなさい」

いやだ、と拒絶される

「いつも君を見るロシアさんの目は怯えてる、違う？」

「黙れ!!!」

私はトリスの首に手を掛けて締め上げる

それでも、コトバは止まらない

「俺なら、君を離さない」

すきだよ

ベラルーシ

そうまつすぐに私を見て言った

私、私は、兄さんが、私、：

背中に回された手は

意外にも強くて

荒れ狂う心が一つの仮定を導く

もし

もしも私が

兄さんじゃなくて

トリスを好きになれたなら

私はもっと幸せに慣れますか？

気づけば

私もすぎるようにトリスの背中にしがみついていた

+++++

世界会議の前日

「ロシアさん」

「ん？なに、トリス」

トリスはびくびくとしながらも決心したようにロシアを呼び止めた

「さっきベラルーシちゃんが走って行っちゃったんですけど」

「ああ、それが？」

それが？

なんて人だ

トリスは内心かなり頭にきていた

さっきの自分の発言を訂正してやりたい

ただ走って、じゃなくて

泣きながら、です、って。

「なにかあったんですか」

「なんで君に話さないといけないのかな」

こるこると不穏に笑うロシア

途端に腰が引ける

でも、今日は引き下がらない

「お、俺はベラルーシちゃんが好きですから。どうしたのかなって、き、気になるんですよ」

ロシアは虚を突かれたような顔をしたあと朗らかに笑った

「素直でいいね。僕トーリスのそういうところ好きだな」

「あ、ありがとうございます」

じゃなくて!!

「ん、理由かあ。だってベラルーシが結婚結婚迫って来て、しかも僕のあとどこまでもついて来るんだよね」

それは知ってます

トーリスは内心苦笑いだ

ベラルーシちゃんの頭の中にはロシアさんのことでいっぱいだ

そんな一途なところも好きなのだ

「でね、あんまりしつこいからさ、ちょっとキレちゃった」

ロシアはなんてことないように笑った

「ベラルーシはしつこいし重いし危ないから大嫌い、結婚なんて絶対したくないよ、もう近づかないで、って。」

「!!」

トリスは青ざめた

「いつもは我慢してて言わなかったんだけどね。ついに堪忍袋の尾も切れたって感じ?」

結構すっきりしたよと笑う

「で、でも!! ベラルーシちゃん、そんなこと言われたら傷ついて…」

「ベラルーシが傷つく? それこそありえないよ。すぐに懲りずに戻ってくるよ、「兄さあん」ってね」

ロシアはひとしきり話したら「じゃあそろそろ行くね」といって歩きだす

トリスは拳を震わせてロシアを呼び止める

そして震えた声で言った

「そんなこと言うなら、俺がベラルーシちゃん貰っちゃいますよ?」

長い前髪に隠れてその表情は伺えなかった

それでもロシアは動じることなく言い放った

「それいいかもね」

口笛を吹きながら

ロシアは今度こそ去って行った

トリスは強く唇を噛むとロシアとは逆の方向へ駆け出した

※※※※※※※※※※※※※※※※

「トリス」

「…っあ？うわあああ」

トリスはベッドから転げ落ちた。阿呆だ。

「ごはんできた」

「…は、はい」

トリスは目を必死に摩り頬を抓っている

「まさか昨日自分の言ったこと…」

「わああ！！だ、大丈夫、覚えてるよ、もちろん」

「ならいいけど」

私はトーリスを置き去りにして階段を下りダイニングに向かう

BGM代わりにつけっぱにして置いたテレビを消してテーブルに突っ伏す

「何やってんだ私」

私らしくない

早く兄さんに会いたい

「…?」

兄さん。愛しい兄さん

呪文のように唱えてその幻影に浸っていたのに

「おはようベラルーシ」

「…お、はよ」

向かいの席に寝癖の跳ねたトーリスが座ると、不思議と私が毎日朝ごはんを共に食べていたのはトーリスだったような気がした

「さっきはごめん、その」

ポリポリと頭をかいて笑う

「帰っちゃったと思ってたから。ロシアさんここに」

「…」

「朝まで居てくれたのが信じられなくて、嬉しくて」

「もういいわよ」

なんだかこちらまで照れ臭くなってしまっただけで続けようとするトリスを手で制した

トリスも恥ずかしくなったのがちやがちやとうるさく食器を鳴らしてトーストとサラダをがつく

「一つ言っておきたい」

「なに？」

私が言い出すとプチトマトをフォークに刺したままにこちらを向いた

「私は誰にも縛られない。縛って良いのは兄さんだけ。だから好きな時に私は出ていく」

「…そっか」

そっかそっか、と繰り返してプチトマトを次々と頬張る

「っでも、」

私は続きを考えないままに言ってしまい途方に暮れた

「でも、なに？」

何も…

ただあなたがそんな顔するから

「…でも、トリスが寂しいならもう少し一緒に居てあげないこともない、的な…」

「ベラルーシ…」

「っあ！！忘れなさい」

私は恍惚と涙を流して感動しているトリスにホットミルクをぶちかました

あっづう！！！！と叫んでるトリスを放置してソファに寝転がり新聞で顔を隠す

何を言っているの私は

私はあの馬鹿に惚れたの？

「あの、ベラルーシちゃん」

「断じてちがう」

「ぶば」

顔をのぞきこんできたトリスに、裏拳。

情けなく崩れ落ちるのを見て私はため息をつく

「兄さんだったらこのくらい堪えて…あ」

トリスは床から私を見上げて小さく笑って言った

「ごめんね」

「なんで謝る？」

「ベラルーシにちょっとでもロシアさんを忘れていて貰いたいのに。
やっぱ俺なんかじゃ無理なのかな」

「…」

兄さんを思い浮かべる

トリスを見下ろす

「トリス」

起き上がったトリスの膝にぺたんと座り込む

トリスの顔が真っ赤になるのが少し良いきみだと思った

「抱きしめなさい」

「はっ？」

「はやく」

「あ、はい!!」

びくびくと、コワレモノを包むように私の腹に腕を回す

昨日はあんなに

こちらが驚くくらいあっさりと抱きしめたクセに

私はなじってやりたい衝動を押さえる

「昔、ずっと昔に兄さんにこうして貰ったことがある」

「そうなんだ」

声のトーンが下がったのが如実にわかった

「寒かった。今よりずっと。でも兄さんがいればよかった。寒さも空腹も兄さんがいれば」

「でも今は…いたっ」

私はトリスの小指に噛み付いた。失言はペナルティーだ

「認めたくないけれど。確かに兄さんは私に冷たくなった。いや、構っている暇が無くなった、と言うべきね」

「いろんな会議に出て、いろんな国と会談して。気を使わなきゃいけないって、兄さんはとても忙しい」

私は頭をぐりぐりとトリスの肩に押し付けた

トリスが髪を撫でたが好きなようにさせた

「…一昨日は拒絶された」

「っ」

見上げると斜めに見えるトリスの目は少しだけ潤んでいるように見えた

同情してるのか、変な男

ぽた

自分の手に水が落ちてきた

本当に涙もろい男だ

兄さんだったら人前で泣くなど

「ベラルーシ」

トリスの細くて大きい手が私の頬を撫でた

私も釣られて自分の頬を触る

？

「泣いてる？私」

トリスは先程の震えはどこへやら、ぎゅうと抱きしめてきた

そして耳元で囁く

「辛かったんでしょ」

「別に辛くなんてない」

「悲しかったんでしょ」

「別に悲しくなんてない」

私は素直になれない

「それでも、
忘れられないんでしょう？」

誰を？

なんてね。

「…うん。
忘れるなんて不可能」

私がそういうとトリスは
笑いながら、泣いた

私達を照らす

朝から昼に変わる光は

今までにみたことがないくらい美しかった

+++++

「じゃあ、帰るわ」

「うん」

「あのさ、ベラルーシちゃん」

「なに」

”ベラルーシちゃん”に戻ってしまったことに若干失望しながら振り返る

「君がロシアさんを忘れられないみたいにな、俺も、君のこと諦められないんだ」

「ふうん」

私は無表情を装う

「だ、だから。
好きでいていいですか」

ぎゅうと舌を噛んで堪える

そこでソレを言うのは、反則。

トリスの肩に手を掛けて
僅かに背伸びした

「ペナルティ12」

「っ／／／！！？」

私はさよならもいわずに
スカートを翻して外に出た

兄さん、愛する兄さん
いま貴方のもとに帰ります

振り返ると案の定真っ赤になったトリスが手を振っていた

口元が僅かに綻んだ

もちろん一番は兄さん

でも二番目は、

— — — — —
e n d — — — — —

(後書き)

読んで下さりありがとうございました(´▽´)

やっぱりなんだかんだいってベラ嬢はロシアさんのもとへ帰って行きます

ロシア>>>>>>>>リト

ロシアに拒絶されても、

ベラ嬢はきつと自らリトのもとへは行かないでしょう

リトはそれを齒痒くおもいつつもベラ嬢の幸せを願うはずです

…とんだ純愛(脳内で)設定です

ちなみにペナルティ12は

…皆さんの妄想次第です(笑)

ベラ嬢とリトアニアの小説もっと増えろ!!な今日この頃です

では、次こそアルの最終回で!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4816n/>

If I were…。～ベラルーシとリトアニアのお話～

2010年10月8日21時19分発行